
“好き”と“嫌い”番外編

紅月夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“好き”と“嫌い” 番外編

【Nコード】

N1835J

【作者名】

紅月夜

【あらすじ】

「“好き”と“嫌い”」の番外編！！

浮竹隊長、海燕副隊長の好きなものとは！？

「なんでまた今日に限って調子が悪くなるかなあー…」

ごほごほと咳き込みながら、一人愚痴る浮竹。

障子の向こうに人の気配がし、迎えようと起きると、先に開けられてしまった。

「隊長ー、ちゃんと寝てますー？って、何起きようとしてんですか！」

「いやー、暇なんだよ、海燕」

はっはっはっはつと笑いながら言う浮竹に、海燕は呆れて言った。

「少しぐらいなら、話し相手になりますよ。だから大人しく寝てください」

後半をかなり真剣な顔で言われ、浮竹にはうなずく以外の選択肢がなかった。

「浮竹ー、生きてるかー？」

二人で隊員の修行状況について話し合っていると、酒瓶とお猪口二つを片手で器用に持ち、もう片方の手で障子を開けて、浮竹の親友が顔を覗かせた。

「生きてるか？は、ないだろう、京楽」

「朝に血、吐いてぶっ倒れたんですから、あながち間違っちゃあ、ないんじゃないですか？」

海燕の言葉にしょんぼりする浮竹に、京楽は苦笑しながら言った。

「まあ、とりあえず吞もうー！」

「駄目ですよ、京楽隊長。朝に倒れたって言ったでしょ。吞むなら

一人で飲んでください」

「ええー」

「いい歳したおっさんが『ええー』。』って可愛く言っても、気持ち悪いですよ。」

浮竹隊長も便乗しないでください」

こつそり京楽と一緒に、ええーと言っていた浮竹を、海燕は目の端に捉えて言った。

「海燕君は、呑まないの？」

京楽は本来、浮竹のために持ってきたお猪口を少しあげて聞いた。

「俺は今から朽木と約束してるんで。」

ああそうだ。京楽隊長、浮竹隊長の話し相手にちよっとなってあげてください。俺が帰ってくるまで」

「いいけど、いつ頃帰ってくるんだい？」

「京楽隊長がその一升瓶を飲み終わるまでには、帰ってきますよ」

「ははっ、いいよ。行つてらっしゃい」

海燕は立ち上がり、障子に手をかけて開けながら振り向いて言った。

「絶対に浮竹隊長に酒を飲まさないでくださいよ。」

じゃあ、いつてきます」

海燕が障子を閉じ、部屋には二人だけが残された。

「すごい念を押されたねえ」

「信用されてないんじゃないのか、京楽？」

「いやいや、浮竹のことが心配なんだよ」

京楽は、大人しく一人で酒を飲み始めた。

「おーい、朽木」

「海燕殿、こちらです」

海燕はルキアと流魂街の入口で待ち合わせをしていた。

「待ったか？」

「いえ、私も今来たところです」

「よし、じゃあ行くか！！案内してくれ、朽木」
「はい！！」

二人は連れだつて、流魂街の中へと歩いていった。

ところ変わつて雨乾堂。

「そつえば、京楽。仕事はどうしたんだ？」

「今日くらい、いいじゃない」

あはははと笑う京楽の背後に、ゆらりと人影が立った。

「毎日、毎日、『今日くらい』つて言つて、仕事したことないじゃないですか！！！！」

「な、七緒ちゃん！？」

「さ、帰りますよ、京楽隊長」

「待つて、待つて、海燕君が帰つてくるまでは……」

七緒は、眼鏡をくいつと上げ、京楽を睨みつけた。

「帰ってくるまでは……？帰ってくるまでは何ですか？帰ってくるまでは酒を飲んでもいいと？今何時だと思つてるんですか？勤務時間中ですよ？」

七緒が言葉で京楽を責め続けていると、どたどたと走ってくるものがいた。

「すいません、京楽隊長。ただいま戻りました……つて、仕事終わらせないで来てたんですか？」

海燕は一目で状況を理解して、サボリだったのかと呆れて言った。

「それでは、隊長。海燕副隊長も戻られたことですし、帰りますよ。浮竹隊長、海燕副隊長、お騒がせしました」

七緒は一礼し、京楽を片手に引きずつて出ていった。

「八番隊つていつも大変そうつすよね」

「京楽だからね……」

しみじみと言う浮竹に海燕は苦笑したあと、真面目な顔をして、口を開いた。

「ええっと……………浮竹隊長」

急に様子の変わった部下を見て、浮竹は姿勢をただし、海燕に向きな
おった。

「何だい？」

「

……………誕生日おめでとございます……！！

！」

その言葉とともに、今まで浮竹の死角に隠されていた包みを、海燕
は差し出した。

「っ……！！！」

てつきり、何か重大なことでも起きたのかと思って身構えていたの
で、浮竹は暫くかたまった。

「…………隊長？」

いつまでも言葉を発しない浮竹を不信に思い、海燕が顔をあげると、
涙目の浮竹がいた。

「忘れられたと思っていた…………」

本当は、隊員総出で祝おうとしていたのだが、今朝浮竹が倒れたの
で、急遽海燕からプレゼントを渡すだけになってしまった。

しかも、隊長信者二名が面会を制限したため、誰も祝いに来れな
かった。

そのせいで、浮竹はみんなに誕生日を忘れられたと思っていたのだ
った。

「また後日、みんなで祝おうって計画してるんっすよ」

隠しておくとまたしよげていそうなので、隊員達には悪いが、海燕
はばらしてしまうことにした。

「だから、その時は泣かないでくださいよ。貴方は一応隊長なん
ですから」

「…………一応って何だ。一応って」

浮竹は思わず突っ込み、包みを指して言った。

「で、それは何だい？」

「おお、忘れるところだった。

隊員全員からのプレゼント……じゃーん、おはぎですー！」

海燕が箱を開けながら言うと、浮竹がおお！と感嘆の声をあげた。

「さつき朽木と一緒に買ってきたんですよ。ほら、朽木って白玉好きじゃないですか。おいしい甘味処を知ってるっていうんで、案内してもらいました」

「へえー。あ、海燕もおはぎ、好きだったよな。これ、一緒に食べよう！」

「俺はいいです。自分の分は自分で買ったんで。それは全部、隊長のですよ」

そう言つて、海燕は懷から小さな包みを出した。

「じゃあ、お茶をいれよう！」

浮竹はいそいそとお茶をいれる準備を始め、海燕に全部奪われた。

「隊長は寝てください！病人なんですから」

やることが無くなり、手持ち無沙汰な浮竹はそわそわし始めた。

「なんなんですか、隊長。大人しくしてください」

海燕が軽くいさめると、浮竹は恥ずかしそうに言った。

「いやー、何だか嬉しくてね。自分の誕生日に、自分の一番好きなおはぎが食べれるなんて、みんなが居ないのが少し残念だけど、なんて俺は幸せものなんだろうなあと、思つてね」

本当に幸せそうに言う浮竹に、海燕は意地悪く言った。

「浮かれてないで、明日までには治して仕事してくださいよ。じゃないと、宴会しませんから」

一週間後、二日酔いの隊長と副隊長の姿が十三番隊でみられたとか、みられてないとか……

（後書き）

一週間遅れましたが……浮竹隊長、誕生日おめでとございます）
、、*）

海燕の性格とか口調とかが途中でわからなくなって、何だか迷走しました（- - - ;）
違和感はまだまだ残ってるんですが……考えてもわからないので、投稿することになりました
気づいた方はお知らせくださいー（- - -）ー
泣いて喜びます

ここまで読んでくださり、ありがとうございましたm（- - -）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1835j/>

“好き”と“嫌い”番外編

2010年10月28日10時07分発行